ペスタロッチー教育賞
受賞者紹介

重症心身障害児施設びわこ学園 小児科医師

髙谷（タカヤ） 清（キヨシ） 氏

昭和12年京都生まれ。京都大学医学部を卒業し、昭和40年に小児科医師となる。やがて重症心身障害児の療育に関わるようになり、昭和52年には重症心身障害児施設びわこ学園（第一びわこ園）の常勤医師、昭和59年から定年となる平成９年まで同園長を務めた。現在も医師として療育に取り組みながら、執筆活動を通じて重い障害をもった子どものいのちが大切にされる社会の意義を説く。

医学部を卒業した髙谷氏は小児科医師として京都大学病院に勤めた。外来患者のなかにはダウン症や脳性麻痺の子もいたが、彼らは感冒の治療が終わると帰っていく。次第に氏は障害をそのままにして子どもを帰す自分自身に、医師として疑問を感じるようになっていった。大津赤十字病院に移って一年が経った頃、びわこ学園から医師の応援依頼があった。非常勤医師として学園の子どもたちと関わるなか、氏は医師として重症心身障害をもつ子どもとどのように向き合うべきか深く考えるようになる。やがて、びわこ学園の常勤医師となることを決意、昭和59年には園長となった。その間に学園の新築移転があり、家庭的生活と医療が統合されるべきとする氏の療育思想に裏打ちされた施設が設計された。また、昭和62年には、その資金を得る活動として「抱きしめてBIWAKO」という事業が行われた。びわこ学園のために参加費1,000円を払い、みんなで手をつないで琵琶湖を囲むという企画である。理解と協力をうるために、氏は立場の異なるひとびとの様々な会合に足を運び、障害児の話をし、ひとびとの実情を聴いた。当日は25万人を越える参加者があった。それまで交流することのなかったひとびとが障害児を身近に感じることでつながっていった。

びわこ学園の創設者である糸賀一雄氏は「この子らを世の光に」と説いた。髙谷氏はこの福祉思想を受け継ぎ、重い障害をもった子どものいのちが大切にされる社会の意義を訴え続けている。人類はこれまで、心を寄せ、協力し、分かちあってきたのであり、福祉とはそうした人と人のつながりを意味するものである。重症心身障害児の側に立つことによって得られた氏の言葉は、失われてしまったつながりを回復しようとする希望の言葉なのである。ペスタロッチーは、社会から遺棄されていた孤児貧児を見捨てず、生活をともにし、彼らに寄り添うことで社会を変えようとした。氏の活動は、このペスタロッチーの精神に通じるものである。氏の長年の功績に対し、第20回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。

ペスタロッチー教育賞　第20回特別賞
受賞団体紹介

あしなが育英会

あしなが育英会は、病気、災害、自死等で親を亡くした子どもたちや、親が重度後遺障害で働けない家庭の子どもたちを物心両面で支えることを目的として設立された民間非営利団体である。国などからの補助金・助成金は受けず、募金や「あしながさん」からの継続的な寄付金で運営されている。交通遺児の支援に始まる活動は40年以上にわたって多くの遺児を支え、ひとを想う気持ちを大切にする社会の実現に寄与してきた。

あしなが育英会の活動は、昭和42年の「交通事故遺児を励ます会」の設立にさかのぼることができる。当時、交通事故によって引き起こされる悲劇は社会から十分に認知されておらず、遺族は精神的にも経済的にもつらく苦しい生活を強いられていた。その現状を遺族自らが社会に訴え、賛同者を得て街頭募金が始められた。彼らの願いは国会にも届き、昭和44年には「交通遺児育英会」が設立されることになる。

交通遺児育英会による進学支援は、経済支援に留まらず、奨学生に必要な生活支援と精神的支援をともなうものであった。遺児の将来を想う個人から匿名で継続的に支援が得られる仕組みをつくることにより、安定した奨学制度を確立した。さらに、奨学生のために学生寮を開設して規律ある生活を支え、夏には「奨学生のつどい」を開催した。つどいに集まった奨学生は、遺児というつらい現状のなかにあっても、自分たちには支えてくれる「あしながさん」がいて、同じ境遇の仲間がいることを確認し、連帯と自助の精神をともに育んでいった。

昭和58年のつどいにおいて、自然災害が多くの遺児を生み出すことに気づいた奨学生らは、交通遺児に留まらない支援に向けて活動を始める。さらに、この活動は病気遺児への支援にも広がり、平成５年には交通遺児育英会とは別団体として、新たに「あしなが育英会」が設立された。従来の活動を引き継ぎつつ、新しい趣旨を得て、あしなが育英会は積極的に遺児の支援を展開する。一度に多くの遺児をうんだ阪神大震災では組織的な取り組みが必要とされ、「神戸レインボーハウス」を建設して遺児の心のケアの拠点とした。現在は東日本大震災によって遺された子どもたちのために「東北レインボーハウス」の建設が進められている。

以上のように、あしなが育英会の活動は、40年以上にわたって、遺児の成長を支え、ひとびとの意識を変え、ひとを想う気持ちを大切にする社会の実現を目指した社会運動であったといえる。子ども一人ひとりの可能性を信じたペスタロッチーの貧民教育実践は、同時によりよい社会の実現に向けた社会改革運動でもあった。震災後の社会のあり方が模索されるいま、あしなが育英会の長年の活動に対し、ペスタロッチー教育賞第20回特別賞を設けて顕彰する。